繪本漢楚軍談

五

へ13
3565
5

門 13
號 3565
卷 5

早稲田大學図書館
昭34.6.3
藏書

訂正
補刻

分本漢楚軍談初輯卷之五

鶴鶴貞高纂述

第十回

沈船破釜項羽勵兵

東都

天下の命令を聽定りて萬里の長城も裡より崩れ灰塵と為し書も蹈略の卷中心を着ざりけん兵を用ひ軍機を富さる英將戰士草澤の埋れ起民間の孺子世の興廢を論ず既に秦の二世皇帝滅亡の兆現てへ王社の長の奴をまで零落せし。楚國の王孫。心が諸將の尊まて懷王と号し自然其威を備へらるしゝば。諸大將を集へて趙を救ひ秦を伐急速凱歌を奏まゞ。そ軍配豫し定まる所へ趙の國より早馬來り。救を求め候と申上まべ懷王へ急ぎ使者を召せ玉ふそ。緯の動作を問王へ使者が奏まる樣秦の大軍三十萬ゆで鉅鹿の城を取圍ミ一月餘り候へべ趙の軍中粮も盡防戰の力も弱り既に

項梁孫名心と稱し懷王の孫名心と稱ものゝ立て又こゝに懷王と云史記を始其餘の書ゆゝ懷王の孫名心とあり通俗の書に米心と記せし誤

危く候へば。大王憐みて兵を起し。速に救ひ玉へかしと願ひて最憂へげに曰けるに。懐王大に驚き玉ひ秦の大軍趙の國へ推寄せと聞く程に早先遣て宋義等に命じ援兵の用意を爲つるに。斯まで危急に有んと思へざりきと宣ひつゝ宋義等を催促玉へば宋義以下の兵各々命を受て即時に彭城を啓行し。安陽まで到りしが宋義は忽ち此處に陣営し兵を按て動かせず。如何なる野心か發けん。諸將に向て云けるは秦の章邯大軍にて趙を圍まること數日なり。思ふに疲倦し志も必ず惰人なるに戰に心なきに我此處に陣営して坐に其躰を觀透し。両軍鬪疲れし時。敵に乘じて一度討べ章邯必ず擒とるべし。我令を傳ゆるまでは必此所を離るゝ事なかれ。空く四十六日を過しけるに項羽進て宋義に向ひ秦の大軍鉅鹿を圍て趙の士卒死まること。大半に及ぶと聞く。我軍已に此處へ來りて急に進んで外より討べ趙の勢も内より應ぜん。其節嚴く夾て戰つゞ秦の勞軍を攻破るべし。章邯如何に猛くとも。味方に敵する事を汲んや。然るを空く日を過すべ趙の城中弥弱り秦軍勝に乘じて味方に悔を至すべ。是を如何せと難ずれば宋義は頭をうち掉て不然々々。夫搏牛之虻不可以蟻破大にして外にある虻いかゝとも内にわるゝの風子を如何せん。假令章邯等戰勝とも。其勢悉く疲弱らん我軍却て其敵に乘じて烈く攻くらべ唯一戰に勝利を得べし。是我軍勢を勞せずして坐而見勝負術なり。馬に騎武具を執てい我公に不及ど坐而運策に及ば必ず我に不及心を鎮めて我下知に順ひよとて。惣軍中に令を傳へ兵士を嚴しく禁めて曰様。假令猛き虎の如く狠る羊の如く貪欲狠の如くなりとも彊しく号令に從はぬ者は皆悉く斬て棄んと觸示し

密に嫡子宋襄を齊の國へ遣はして齊王の宰相と成んことを望しむ日夜
飲酒高會して徒に日を暮しけるが正に此時天寒く大雨數日降續
士卒大に飢凍て怨むる者も多ければ項羽再度宋義に見へ御方の將
士勇猛にして急に進んで秦を伐速に功を成んことを然るに將軍此所に
久しく淹留為玉ふこと奈何ぞや近年飢饑打續きて人民ども食に飽ぎ況
や陣中兵粮も甚だ乏しく日夜を分ず酒宴して娯み玉ふこと何事か
秦の兵は強く趙の兵は弱うして弱を以て強に敵を強へんとすれば勝ん耳
將軍何の故を以て秦の敵に乗玉ん今武信君新に亡びて懷王日夜御
心を安ずる玉ふ。楚の軍勢を悉く將軍に授玉ふに推量に及ず專に趙を救
ん故のみを以て實に秦を打破り前日の恨を雪ぐん爲なり。尓れば國家の
安危いこと此一挙に有りとのべし。斯る大任を受ぐ。何とて士卒を憐まず

將軍終日私に酒宴を催し主を忘れ社稷の臣と云べからずと色を正して云
けれども宋義は更に用ひねば項羽は深くこれを恨み。次の日晨に上將軍
宋義が陣に到りて其帳中に進行大音揚て曰くは宋義竊に宋
襄を齊の國へ遣て宰相と交を求め齊と議て楚に反き空く此
處に日を送り齊の兵を待合せ楚を取んと企る逆心既に現然り今我
陰に懷王の密詔を承奉り宋義を誅して三軍に此趣を諭ずべし。逃
出んとする宋義の髻を揪んで引戻し忽ちに頸を刎ねる是時諸
將は項羽が猛勢に慴懼して敢て枝梧者もなく皆拜伏して云けるは首
楚の後を立る者は將軍の家なりけり。將軍今日逆臣を誅殺し玉へ
衆皆快よしとせり。誰れは從ぐべんやとて相共に量議す。項籍を推
貴で假に上將軍と号し急に人を遣して宋襄を追ひ齊の境に

及ぶ時、僅くあまを追付て、忽ちあまを斬殺す。扨も項羽が此言を緒詳くに、二式ふくるに、桓楚を以て使と。彭城の在まを懐王に奏しけるに、懐王此由聞玉ひて、鍾離昧が節を持せ安陽に使と。項羽を拜し上将軍の封ぜ玉ひ、程なく項羽が卯綬節鉞を受納め彭城の方に向て恩を謝し、大に勇悦び英布を先隊の大将と。這の精兵三萬騎を相授先早く河を渡りて秦の陣へ攻蒐とぞ命じける。章邯が此由を洩聞て、然べ手分を成んとて急ぎ司馬欣董翳に軍勢を分與し、黄河の岸に陣を取て防ゆんとまる所へ英布が二萬の勢を督し、急ぎ河を打渡り驀地に押寄ければ、待禦る司馬欣董翳馬を雙て打て出るに、英布が何の會釋もなく、斧を振て伐て入る。馬蹄の塵は天を覆ひ、鯨波の声は地を動す。雄旗を左右に打颯々と、剣戟よく火を散し、追つ追まつ戰ふうち、斯る所に秦の軍兵

俄頃に乱驟つ。思ひも寄らぬ後より、項羽が軍兵を引卒し、烏錐の駿馬に鞭を加へ猛勢恰も大浪の怒りて磯を撃如く、微塵に砕るとて截くに、司馬欣董翳大に驚き、前後の敵を顧ることもなくねべ為方なく、棄鞭打て走りける。是のみならず河南の陣屋に悉く楚の兵が奪ひ、秦の諸軍は河より北へ散々に成りて敗北走り或は味方の踏殺され、或は水に溺れて死る者数を知ざりける。項羽は十分勝利を得て、敵の棄る輜重を、幾許とく取集、暫こゝに屯陣せり。人々は此度の戰ひは、楚の上将軍項籍が威勢、遠近を震其名は諸侯を驚かせり。宣なる哉此時は國々の諸侯の兵、趙を救ん為にと、十餘箇所に壘壁を構へ、空しく數日を送りつ。秦を懼ぢて誰として兵を縦るはなかりしが、項籍が秦と戰時、諸國の諸侯各々が壘壁の上に登遥に楚國の戰士を觀るに、一人として十人に當らざるものの更になく、呼聲は

天地を動し。截崩して容體を眺望て心の惴恐き舌を巻て居こうしゐ。
忽地楚の軍勢い秦の陣中を微塵の如く撃碎けば是より諸侯い屈
服して。楚國を盟主ゐ為ーてんと思ふ心の生ずけるゆゑ所へ趙の大將陳餘い
使者を秦らーつ。將軍願くい此機ゐ乗ー速ゐ兵をもつて敵を亡ーエへやと。
一向ゐ請求ひまべ云ゐや及ぶと項藉い士卒を激勵ー真先ゐ馬を河へ騎
込つ北の岸辺ゐ蒐上り。胡牀を置せて腰打懸手ゐい寶劔を拔持。後陣の
渡畢るを待て諸軍勢ゐ打向ひ是ゆき拙言て曰けるい秦の軍勢日久く。
鉅鹿の城を取圍ミ人馬共ゐ疲きこと汝等心を一途ゐー足こうとゆ前
進ミ急くゐ撃敗らまよ退く心有べからぎ。努怠るゆと諭示べ。衆皆異
口同音つ只願くい將軍の令ゐ従ひ命限り奮撃突戰為申さんと。
潔く許諾ゆまべ項羽い大ゐ喜びて。扨悉く舟を沈め釜を碎き甑を

割。廬舍を燒つ輜一里を弃。軍中纔ゐ三日の兵粮を用意させ鼓譟ーて攻こる。
斯處へ范增い後陣の勢を引卒ー。河の滸ゐ來りつ。上將軍項藉ゐ舟を
沈め釜を碎き士卒を激勵由を咎。鍾離昧ゐ向て云ひけるい項將軍い急くゐ
章邯を破らん為ゐ軍中纔ゐ三日の粮を持らーエひーん士卒の心を一途ゐーて。
死力を出ー戰いる勝利を一時ゐ爰せんと謀圖エひー所爲ゐーて是ゆ所謂
兵法ゐも死地ゐ入て活路を求る方便とおもへ知らまこう。足下何と思ふ
やと問へべ田荅て鍾離昧ゐ最ゐも有ん項將軍い智勇を備ー大將哉と
稱讃まべ范增い再度鍾離昧ゐ教て曰雖然萬一三日の中ゐ打勝ゑを
得ざる時い人馬必ず飢疲却て敗を取ぬべー。我此故ゐ是を思へべ密ゐ人を
遣ーて後陣ゐ残せー粮秣を火速ゐ河南の岸へ運べ。ゆゑゐ河南の陣
三日の中ゐ打勝べゆまゐ過こう幸福ゐく若勝ゑを得ざる時い河南の陣

○文錦堂藏

退き。人馬の疲労を休め。尓き節は進退とも。是両全と云べしと。諭し示
せば鍾離昧は。大きふこれを感服し。さるにも先生は。寔ふ遠き計せる。鬼神
不測と云べしとさゝふ嗟歎をしゝけり。偖も両人は商議しゝ陰ふ人を遣して
兵粮馬草を催促し。河南の陣へ取寄せゝり。先是ふ秦の敗軍司馬欣董
翳の両人は。残少ふ打ゝ散ぬ。僅本陣ふ逃回り。章邯ふ見へ口を揃へ。英布が
武勇當り難ふ。項羽自ら勢を催し。思ひもよらぬ後を襲ひ。身方大きふ
敗軍せり。必定彼等は猛威ふ任せ。此所へ推寄べし。急速備とるべし玉へと云も
果ざる其所へ。追々ふ早馬來りて。注進する様。項羽は河を打渡り。釜を破り
船を沈め。命を棄て戰んと。勢甚盛るゑば。早攻來り候はんと。戰慄惴言を
ふゞ。章邯急ぎ秦の大將王離。涉間。蘇角。孟防。韓章。李遇。章平。周熊
王官等を。一箇處へ聚會し。商議しと云けるは。項羽が武勇は群を抜で。三

軍ふ秀ぬれば。力を以て戰ゝ。最勝を取難かるべし。汝等各々一軍を領して。九
箇所ふ分ち。陣を取々。潛居て我先自ら馬を進め。彼と戰を見るべし。入
交入交攻合せ。楚の軍勢を誘きて。深く重地ふ入るを候ひ。九ヶ所の兵を一陣
ふ。一引包で打敗れ。尓せば必打勝るべし。努力怠るなと。説示し。軍配一々
定まるゝ。今や遅しと待蒐こそ。

第十一回　范増定謀破秦夜討

尓程ふ項籍は諸軍を督して。寄來り秦の章邯が真先ふ。馬を進め來るを見
より。牙を咬で大きふ怒り。罵て曰けるは。やれ逆賊。汝は我季父を殺しされ
俱ふ天を戴ぬ仇敵なるぞ。其場引なと云。偖ふ鎗を撚て突かゝる。章邯は兼
て期しされば。迎合して戰ふ。支五十餘合ふ及びければ。膂力弱りて引退く。
項羽續て追蒐れば。王離が一軍を引具して横合より擊て出。是を遮留

い。二十餘合ぞ戰ける。其時項羽ハ鎗を止め。王離が突んとする所を急ぶ身を避馬を寄鎧の上帶掻摑地上ふ丁と投げきゞ。楚の軍勢簇り寄り。頸縛りて四り行。章邯是ふ怕きをゝ。馬を打て走りけきゞ項羽ハ後より大音あげ。逆賊何処へ逃るとも。能逃さんやと呼ゝくゝ兵を驅て追蒐ふ騎る馬ハ烏騅の駿足飛が如ふ只一騎。真驚ふ進ぶ。章邯續敵ゝきを見侮て蹈止りてふ勝負を爭ひけるが。吽ふぐうも有ざれゞ。又りや逃んとする処へ。渉間一隊引來り。這を助て戰へゞ項羽ハ直ふ馬を交へ十合餘り戰ひ。忽腰より鐵の鞭を取出し。渉間が頭を割よと打けるを。渉間目利躱んとせゞ。左の肩を健ふ打て馬より浴ふけ。章邯再應や宋文を出し項羽を防せ。偖渉間を救へと。會釋処へ楚の大軍潮の湧ふ異ゝ。天地を動し馳來り。英布桓楚等真先ふ馬乘回し戰へゞ。秦の軍勢此時ふ夥しく討れ。章邯方纔

虎口を逃。馬ふ任せて逃去けり。斯し程ふ此日もゝ夕陽已ふ山ふ入り。漸暮れんとする程ふ項羽ハ敵の伏勢を設し。支も有んと肯て長くも是を追ぎ。金を鳴して軍を收め。陣営を構て休ける。時ふ范増云けハ。將軍深敵地ふ入り。日もくや金暮れゞ。敵の夜討も圖まゞ。心構をゝ。王へ項羽ハ是を打聞て。軍師の言甚ざ。好我意ふ合ゝ。軍配を定めて相待ゞ。指揮せれと云けきゞ。范増乃小山の口ふ陣屋を造諸軍を宿し。偖本陣ふハ柴を積。四方の門ふハ旗幟を立。最嚴重ふ見かけつ。桓楚于英丁公雍歯四人の者を召寄。足下ゝ皆手勢を率て山の間ふ埋伏し。本陣ふ火の掛るを見ゞ四方ゝゝと打て出。敵の囲る路を塞げ四人乃許諾して。部下を引て出けれゞ次ふ英布を招きて。足下一隊の勢を率。西の路ふ潛伏て。秦の後陣の勢續ゞ路を遮追退けよ。英布乃出けきゞ。項羽ハ范増と供侶ふ本陣の

後ふ居て敵ゆ寄ると待かさうと。亦程ふ章邯ハ稍敗軍を集へ。漸々蘇角が構ふ。陣営ふ逃入つ。司馬欣董翳を待合せ人馬の息を休けり。蘇角が陣ハ楚の陣と。三十里隔て屯剳まれば。蘇角密ふ議て云様。楚の孰も終日の戰ふ勝傲えれバ人馬とも。甚く疲労て有バ。今夜ハ定て油断まべし。某騎馬の精兵を揃て東の路より進ミ。楚の陣の後へ廻らん。將軍ハ西の路より寄。夾伐ふ。ゑ〜王ゑで項籍奈何ふ猛とも。首尾相顧支不克と。陣中頗乱ゑ〜。是兵法の守ぎる所を攻ると云者ゑり。全き勝利を得ぎ。そも必鋭氣を挫べ〜。章邯ハ此義最もと。蘇角ふ一萬餘を授け。西東より推寄る。蘇角ハ我うふ神妙の計略と思ひふけれバ。直ふ楚陣ゑ到へ。窺ひ見まべ立さ〜し。旗も幟も其侭ゆ。轅門ゑ大開ゑれば。成就うと勇喜び。出と喚て蒐入けるふ。敵一人も出合ねば。怪ミ驚き火速ふ。此処を出んと

まる時ふ。鉄砲一聲響〜。四方より火を放ち。喊の聲ハ地を震ひ。旗の手十方ふ翻る故。偖ハ敵ふも用心あるとゑ。西の路より走りけまば。左より。桓楚干英。右より雍歯。丁公。四方へ兵を相分ち。餘さでとゑ取圍。蘇角ハ大半討とらまと。東の山路を望へ走り去んとまる所へ。皷角天ふ喧〜。喊の聲地を動し。一人の大將蒐出し。無謀の匹夫我ハ是楚の項羽ゑるを知ぎゆと云さゑ馬を踊せて。只一鎗ふ突殺ゆ。章邯遥ふ喊の聲。皷の聲を打聞て。蘇角ゑ討れ〜支を知ぎ。手勢を引て進処ふ忽然とゑ〜て。皷の聲。耳ふ郷音程とゑあまま。楚の大軍潮の湧如く風權しゑぞ攻來る。於是章邯惴〜慴〜。膽魂も身ふ添ねば。況ゑや部下の軍兵ハ騒乱まゑて蹂躪可為吉ゑも知ざる所ふ。夜ハ明方ふ成けまば。皆我先ふと逃走る。章邯ハ味方を落さん其為ふ後陳ふ支引けるを。英布ハ目利ゑてかり。五十餘合相戰て。勝

こうう
項羽
勇を
振つて
章邯を
破る

負はまぐ決せざるゆ項羽が大軍馳來り。喚き叫んで蒐立まば章邯遂ゆ支へ
うね散々ゆ崩て已ゆ危く見える処へ一隊の軍勢來り救ふ是則秦の大
將孟防と云者なり。楚の軍兵これを支とせず。火華を散して相戰桓楚ハ
ゆ跨る馬を交へ彼孟防を打取ば。章邯忽魂飛び西をさして敗北す桓
楚ハ是を打見やり。能敵なりと思ひければ飛が如くゆ赴くなる。章邯今ハ
飢疲戰氣力も無まゆ。後を見ずして走けるが小高坡を起るを。忽ち
馬より落けまば桓楚ハ跡うと鎗を操出し。已ゆ突んとまる折しも。山の
間より一隊の勢。馳來て這を救ふ是則別人ならぬ秦の大將韓章之
章邯を相救ひ桓楚と接戰へば。又于英が兵蒐來り。喚聲ハ天ゆ響く金
鼓の音ハ地を震ひ秦楚の軍勢入乱れ死生知ぬゆ戰ふ所へ旌旗を風ゆ
吹靡かせ。劍戟を日ゆ輝し。項羽が一軍蒐來り面もふらず攻かれば。韓章ハ

散々ゆ悩まされて部下數多討取られ棄鞭打て逃走り。味方の李遇が一萬騎
ゆて。まぐ戰ぬゆ叩る。陣中へ蒐入遂ゆ一手ゆなり。險阻ゆよりて陣を取
靜まりうくつて居さりける。項羽ハ續て追蒐けるが。秦の軍勢悉要害ゆ
倚て陣を取り。堅固ゆ守る体を見て。輕々しくハ進もせず暫人馬の息を
休め兵粮を遣ひ秣を飼ふ。斯し程ゆも其日も稍暮るんとまるをもて金
を鳴して軍を收め。野陣を張て叩さり。范增ハ陰ゆ項羽ゆ向ひ秦の軍勢
悉く高陽の坡の下ゆ陣取せし心根を推量まるゆ彼等今夜味方の夜
討まる支もやと危く恐まそ本陣ゆハ人衆を措ぎ外ゆ伏て。寄來る者を
前後より。包で討んと計るべし。若敵の計謀ゆ就き。却て計謀を用ひるば。
章邯を擒ゆせん。項羽喜び問けるハ。先生如何なる妙計ありや速ゆ教諭
さるべしと。曰ば范增尓ばとる將軍自ら兵を引き。秦の本陣ゆ打向ひ鼓を

鳴〻鑼を打。攻くる体をみて。却て二隊の精兵を。敵の伏勢の來るべき路
まぎらふ潛せ置き。悉く是を打破り。勝に乘て追討玉へ。章邯以下の
的等を。擒ふせん吏。必定此壁拳ふわりぬべしと。曰ば項羽ハ眉を開き笑を
含て大きに喜び。即時に英布を召寄て。一萬餘騎を授け。南の路より
向しめ。桓楚に一萬餘騎を付け。北の路より向しめ。項羽ハ自ら三萬餘
騎ゆて。中の路より推寄ける。偖章邯ハ敗卒を漸々に集め。李遇韓章等と
商議して。章邯這等に云けるハ。楚の勢連日打勝て。今夜も必定夜軍
せんか。尓ば味方も用意を可為。先李遇ハ五千騎ゆて。南の坡の下なる深
林の中に埋伏せよ。偖韓章ハ五千餘騎ゆて。北の坡の下なる深林の中に埋
伏し。楚の勢來らば起り立其後を取截べし。我ハ司馬欣等と倍供に本
陣の後に伏て。前後三方より取巻べ。忽項羽を擒ふまべし。軍配一々に

定まべ。項羽遲しと待かけり。尓ば其夜の初更の頃。楚の勢ハ皆枚を啣
南北二道に引分き。そろくと打起けぶ。項羽ハ自ら三萬の精兵を率へ中の
路より發向し。秦の本陣へ推寄ら。鼓を鳴く鑼を敲き。喧しく鉄砲を連
放ち。喊を出と揚ければ。章邯等是を聞驚破て敵ハ寄くるぞ者共進やと
下知をなし。本陣の後より。出と喚て打て出。水火ふるまと戰處へ李遇韓章
の両個ハ散々に討なされて。逃回り。南北の伏勢ハ悉楚の軍に打破られ
辛くして。一方を截開き回しのまに告ぶば章邯色を失ひ。先項籍を支
えつ。軍配をるまんとする処へ。無限楚の大軍南北より攻來り。餘さじとて
揉ぐりける。秦の軍兵ハ大に乱れ。陣屋を棄て我先に。右往左往と逃走る。
項羽ハ味方の勝を見て。尚も厲く人馬を駆入乱て斬廻り。手痛く戰容
体ハ霹靂の雲を裂き。不周風の樹を倒す猛勢烈々終夜。二十里ばかり追

蒐て。趙の城下へ來けるに。城内ふても鼓の聲。喊の聲を打聞て。敵の勢の來を知り。樓門ふ登見るふ。秦の軍勢敗北し。右往左往ふ走りけるに。城兵も勇喜び。開を排て打て出面もふ。ふらぶ斬て蒐ハ。章邯愈乱立前後を顧られねば。僅ふ殘兵五六騎なり。辛逃て落行ば。英布ハ一軍を引率し。逃さじとぞ追走らし。城の東門まで追つめ。秦の大將章平が敵ひの勢ふ出合てまくと是と渡り合。三十餘合ぞ戰ける。章平ハ只身方ぞ敵さん哀を思ひ戰ふとを好まねば。辛虎口を截開章邯を扶出し。曲陽の小路より。勢を圓ぞ走りけるが。秦の大將周熊王官二人ひとしく一軍を率來りて。敵ひ戰ば。英布も此より引而。桓楚が軍と一堆ふなり。項羽ぞとそハ見へける。趙王歇樓門より。秦の軍勢の悉く。退きるを望見て大ふ喜び窮鳥の籠を出る思を成し。張耳陳餘ふ命ふ。城外ふ酒宴を設け。楚の軍勢を労ひけ。偖も項羽ハ此時ふ。趙の救ふ陣壁せし。諸侯の將を召見るふ。皆轅門より膝行し。敵仰て其面を見上る者も無りけ。ふハ項羽ハ是より上ぞ。諸侯の上ふ坐り。諸國の將ハ屬けり。時ふ趙王歇ハ。尚も項羽を饗應すく。城内へ迎奉んと人を以て言送れど。項羽ハ辭退の面言し。未城ふハ入ざらぶ。章邯が勢破れ入日を送らば。章邯再應や氣力を直し。急ふハ破り難らん。此由を巡言せそ。趙の使を面しけ。夫より項羽ハ季布と鍾離昧と二人の將ふ。二十萬の軍勢を分ち與へ。趙の城外ふ陣を取せ。生擒置し。秦の次將。涉間王離が頸を刎。軍神を祭。ふて自身ハ三十萬の軍勢を引卒し。又章邯を追蒐けり。

軍行次車を以て陣とす。轅相向へて門とる。故ふ轅門と。史記の張晏が注ふ見へ

第十二回　趙高讒李斯亡其族

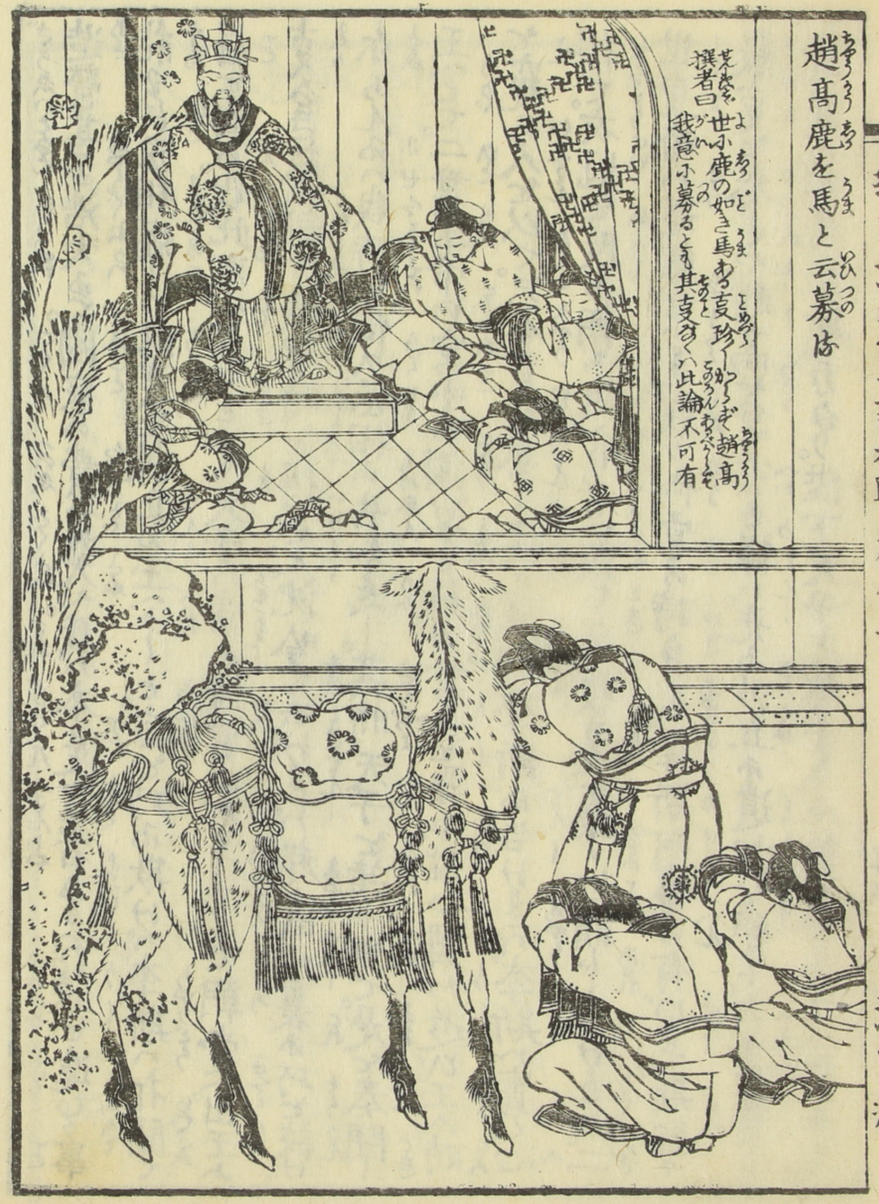
ふ程ふ項籍ハ三十萬騎の精兵を。隊伍を正しく啟行し。章邯を追進

けるに。路々の百姓等ハ或ハ簞食壺漿して迎へ國々の諸侯を招ゐざるを來り服し威風愈盛なり此故を以て一日ハ五十里あるハ三十里兵を蒐て進ゝぶ秦の諸將ハ恐怖をなし皆々遠く落のびて范增ハ是を諫章邯遥ハ逃失て諸國の諸侯悉く皆將軍ハ來り降る是天人の應と云べしされば將軍家を化し國と爲の計策又此時と知まとう然ハ何ぞ輕々しく親矢石を冒して窮せる寇を追玉ふぞ況や三日の間ハ九度戰玉ひて秦の軍勢三十萬を打破らせ玉ひしハ前代未聞勲績なり因て某愚意を以て是を倩料見るハ不如暫く漳南ハ御陣を屯ろし玉ひて人馬の氣力を養ひ江湖の動靜を見玉へかしと申せば項羽ハ最もとて此所ハ屯を營ち各々英氣を養ひ諸國の勢を招け此時秦の二世皇帝ハ昏闇ハして征戰の苦労をさへ知ざるハ彼嬖臣なる趙高ハ妙忌なる小人なれば。章邯が軍破れたるより。屢救を求れども。心裏ハ何とも思ひけん。敢て是を奏せる支なく。專酒色を勧むるハぞ。二世皇帝ハ日夜を無差別酒を嗜色ハ溺れ。只管趙高を寵愛し。天下の重き政令さへ趙高一人ハ任らるる斯りければ趙高ハ愈逆威を振ひ。少しも已が意ハ順従ざる者ある時ハ。陰ハ事ハ託て。是を罪ハ落なる。百官上下戰慄恐怖。阿り諛ざる者なし。

ハ程ハ章邯ハ打殘されし部下の兵十萬ばかりを引具して。漳河を渡り退て函谷關ハ陣を取り。追々馬を飛せて。救を求め奏せけるハ。天下の諸侯悉秦ハ背き楚ハ順ひ。項羽が勢強大して。秦の地を攻麾け。支已ハ急なりと告るとゝ。百官ハ趙高が威を憚怖て。帝ハ奏まることを沿ぎさるどハ虎狼の威を振へど。尚も飽ぎを恩ひけん。或日一箇の大鹿を。二世皇帝ハ献りこれを馬なりと云ければ。二世皇帝歎ぜ宣ふ。卿何とて誤まる。これハ鹿なて馬ハ

あらぬ。汝等ハ馬ヲ鹿ヲとて。近侍の臣ヲ問せ玉ふ。口を閉て不言もあり。或ハ趙高が意ヲ阿り。馬ヲ鹿ヲと云者もあり。又ハ直ヲ鹿ヲとて。これを爭者もあり。趙高熟これを聞。偖鹿ヲと云し者を。密ヲ罪ヲ事よせて。皆悉殺けゝ。百官愈怖を。此より國の政令を。言ゆの更ヲ無りける。丞相李斯ハ趙高ヲ。權を專ヲまゝを見て。日來不平を懷ク。鬱々として樂まぬ色あり。けゝ。趙高ハ早も これを精察し。心の裏ヲ思ふ樣。此者を生置時ハ。始終我身ヲ害ありなんと。罪ヲ陷さんと。或時李斯ヲ打向ひ。面を和柔曰けゝ。偖も近頃關東の國々大きヲ乱驚き。六國の子孫蜂起して。皆悉く秦を攻む。先ヲ章邯が征伐ヲ發行しゝど。三十萬の軍勢を忽ち亡さゝて失ふゝ。國家の大支此ヲあゝ。岌々として寧ふゝ。天子ハ是等を思召さで。遊樂ヲのゝ耽り玉ふハ最歎ゝしき支なりゝ。況ても頃日阿房宮の造營甚ゝ浩大ゝ。國家の費莫大ゝ。我ハ本是宦者なゝ。諫を進む事能ハゝ。丞相願ハくハ此支を諫止め玉へゝと。言を巧ヲ欺けゝ。李斯ハ打聞て眉を潛め。我此事を憂ゝども。天子ハ常ヲ深宮ヲ。おゝ〜まして朝堂へ出玉ふ支なゝ故ヲ。諫を進む時を得ゝと。沈吟て云けゝ。趙高心裏ヲ巧を設け。ホらんヲハ我時を伺ひ。丞相ヲ告知ゝ。其時天子を請ド申て。是を奏聞玉へとて。二世皇帝の宮中ヲ。酒宴を設け。宮女を娶ゝ。謠ハ舞ハ遊び玉ふ時を窺ひ。人を以て。只今支を奏〜玉へと。丞相李斯ヲ告けゝ。李斯ハ實ゝ心得て。衣冠を改め朝ヲ出。宦者を以て三度まで。天子を請ド申けゝ。二世皇帝ハ逆鱗せらゝ。朕が御宴の時なるヲ。李斯何事の有ゝて。斯輕々敷支を奏ゝ。趙高答て言ゝ樣ハ。先ヲ沙丘ヲ遺詔を變ド。大子を易〜籌策ハ本是李斯が力なり。陛下天子と成玉ゝ。土地を分ちて王侯ヲも。

趙高鹿を馬と云事



封じ王りと思ひしふ今ふ至るまで御沙汰なけれども李斯い毎常心の中ふ深
く怨を含さり。適ふ彼が長男なり。李由い三川の郡守とり。密ふ楚賊と内
通しり。況や李斯い外ふ在て其ハ權威の重き事陛下よりも過りしり。彼が
楚人と往來さまるハ實ふ野心有故ならん。能々是を察し王へと。信しやふ
讒さまぶ。二世帝是を信じ。深く李斯を疑ひ王へハ。李斯ハ此由を洩
聞て。偖ハ趙高が讒を構へ我を害せんと為うと。即時ふ事實を上
書して趙高が罪を奏聞さるふ。二世皇帝い是を寔とせず。趙高ハ素清
廉ふして下人情ふ能通じ。上まで朕が意ふ適り。朕初より趙高が賢
なる度を知り。ふ舉用んと為さるふ。卿何とそ是を詣や。朕若趙高をき
時ハ。誰を用ひて内外の政をハ理せしめん。卿只今阿房宮の造營の役を止
むとも。元來此宮ハ先帝の造せ玉ふ所なり。卿天下の盜賊を禁ずとも

能ずして。朕が造營を禁ずハ。今朕を以て先帝の御志ふ背くと。不孝の
汚名を顯して萬民ふ悪しめんとまるる。是上として先帝ふ報ひ奉ること能ず。
次ふハ朕ふ忠ならぬ。ア祿素餐と云べし。何を以て丞相の位ふ居ぞと廷
尉ふ命じ。是を糺聞さるるとつ。私ふ楚人と通ぜしハ。國家を反覆させん
ずる至極の罪ふあるれば。五刑の律を論ずるぶ。腰斬ふとを處さべしと即ち
李斯が三族を咸陽の市ふ引出し。是を悉く斬せる。此時ふ李斯子を
顧て曰けるハ吾欲與爾復牽黄犬俱出上蔡東門外。逐狡兎以為樂。
豈可得乎。顔見合せ父子一等聲を放ち哭哀し斬けり。原來李斯ハ是
刑名の學を好て不仁なるとぞ才略ものこと超世て趙高などが比類ふあらず。
尓ハ秦の始皇を佐けて天下を治め。勲績ハ少きるふあらざるを。二世
皇帝ハ昏闇して國の大臣を殺せし哀くも亦危けを。時ふ大將章邯ハ

函谷關ゐ陣を取り。固守りて居さりしが。兵粮馬秣乏しくして人も馬も疲
果諸侯の勢ハ楚を扶け。是を攻るを急なるべ。防ぎ支ゆるを能ハざるして。
夜を日ゐ継で馬を馳せ救の勢を求めども。趙高隠して帝ゐ奏せず。百の
官ハ是を聞て心ゐ愁哀ども。害を畏て不言。然バ此等の趣きを。二世皇帝ハ
知玉わず。日夜の酒宴ゐ疲玉ひ。後宮ゐ入御龍床ゐ上り。未睡で御座しが。
侍御宮女と。内官どもが物ごりて。今日早馬の來りしハ消息如何ゐと
尋るゐ。内官乃ち回答して。御方の勢ハ九度戦ゐ打負て。三十萬の軍
兵ハ殘少ゐ討るされ。楚の勢不日ゐ關中へ攻來らんと曰送るとり。若ゐん
ゐハ我輩ハ何を以てゐ身を有ん。哀べしと云けるバ。二世皇帝ハ床上より。
這を聞せ玉ひて。起るやいなや其者共を。即時ゐ御座遐へ近く召させられ。
汝等何をゐ物語るぞを明白ゐ奏せよと。宣ひけるバ内官どもハ。涙を

流し奏して曰。今天が下悉く秦を背て楚ゐ降り。大將章邯ハ三十萬の勢
を強半ゐ失ひ。亦ハ楚人ハ勢ゐ乗り。不日して此所へ攻來らんと云支を
臣等ハ只今物語てひと申て二世皇帝ハ聞せらるるを打驚りせ給ひて。
汝等何とて是を知りしぞと。宣ひけるバ内官ども。陛下ハ知せ玉わぬど。
内外の臣一人も。知ざる者ハ候ぬぞ。亦ども丞相趙高ゐ陛下を惑ハし
奉りて是を告奉らぬゐ。若差踰て奏しゐバ。罪せらるんと恐るゐ故ゐ。今日
まで奏せざりけるなり。願くハ陛下火速ゐ救の勢を催され。民の塗炭を
濟ひ玉へと。聞せらるるを。二世皇帝ハ急ぎ趙高を召出し。大ひゐ怒り
詈罵玉ひて。汝大小の政を執行べき職ゐして。今天が下變乱して。國家危
急の時ゐ。是を朕ゐ知さるして。却て朕を欺くハ。其罪市ゐ斬るべしと。
宣ひけるバ趙高ハ冠を脱て頓首して。臣丞相の貪ゐ備り。只顧内の支

を治て陛下の坐大平を享玉ん事を欲も。賊徒を征伐する如きい。大
将軍章邯等ゞ統職ところゝり。小臣一人如何して。内外の支を義治ん。
今若使を馳らるゝて。章邯等ゞ罪を責。別ゞ大将を選きて。征伐させ
め玉ひなば。賊徒いかゝぞ滅ぶべし。況て斯る傳説ハ多く誤の有りの古今章
邯ゞ注進きゞ。輕々しくも内官の偽言を信ト玉ひ。臣を罪せらんとハ。まこと
誤らぬ玉もぞやと。言を飾て云ければ。二世帝ハ亦是ゞ悉さと。御心を安て
日夜遊樂とゝ玉へば趙高ハ退き思ふ。章邯救を求れども。我押隠して
奏せねバ。彼此故ゞ内官と。密ゞ通じて此支を。皇帝ゞ知しめらる故ゞ。我
斯責を被まりと。牙を咬で章邯を。數日恨み居さりしゞ。只今長史司馬
欣ゞ。大将章邯の使として。支を奏聞せん為ゞ。函谷關より來まりと。丞
相府へ報じけれバ。趙高い大きゞ喜び。我先自對面せん。朝門の外ゞ待しよ

と。下知せらるれバ。取次者ハ。退出て斯と告るゞ。司馬欣ハ是を打ち聞て。
即ち朝門外ゞ行き。三日の間待けれども。趙高ハ出て對面せぬ。司馬欣
深怪しゝ。門を守まる者共ゞ。金銀を與へ欺きて。趙高ゞ僮と語ひて。支の
様を尋るゞ。僮ゞ有ぞ告けれ。丞相常ゞ章邯を怨ゝ悪ゝて敗軍の罪
を正さんと云玉ふ。將軍ゞ來まろハ。是網中ゞ入ゞ等し。不如對面一玉
なで。回り玉へと教めきべ。司馬欣大きゞ打驚き。急き馬ゞ打騎りゝ。夜を
日ゞ継で京師を出。函谷關へ逃回る。趙高ハ是を知ぬ。三日ゞ間司馬欣を
朝門外ゞ留置き。其間ゞ章邯と。司馬欣董翳ゞ一族の。京城ゞ殘り
住まるを皆悉く是を捕へ。偖司馬欣を連來まと。其下吏ゞ下知せれバ。
二日以前ゞ逃去りと。面來りて報ぜきべ。趙高大きゞ怒をゝし。即時ゞ四
人の將ゞ命じ。急ゞ是を追しゝるゞ。其跡ぞゞも見ざきべ。路行人ゞ尋るゞ。

早三百里ハ隔ーるゝんと。告る故ホ是非もなく。其侭空ーく引回ー。此旨趣を報ぜバ。趙高ハ嗔り怒ミ。四人の将を痛く叱。二世帝ホ見へて云けるハ。章邯司馬欣董翳等久ーく兵を統領ー。勲功をーも立ずーて。タタく味方を失ひ。却て賊徒を引つれて。都を騒動ーめんとも。若法を以て論ぜバ。死を賜とも足らざるべ。疾大将を選出ー。是ホ代ー王へと奏ス。二世帝是ホ従ひて。趙高が姪趙常を函谷關へ遣ーて。章邯以下の大将ホ。早く京城へ回まよと。詔を下ー玉ふ。尓て司馬欣ハ夜を日ホ継ぎ。函谷關ホ馳回り。主将章邯ホ見へ。趙高權を專とー。殺ス事を行。讒言を以て君上を惑ハー。将軍及び我輩ホも害を加んと計る由。某聞て速ホ馳回り候ふと。都の体を巨細ホ告まバ。章邯ハ大きホ驚き。且歎息ーて曰ける。今是内ホ奸臣あり。外ホハ乃ち勁敵あり。両なら難時なり。我如何ーて免脱んと。諸将を聚め議ずるところホ。董翳まるつち進出で。今趙高ハ奸を設け。妄りホ人を陷ー入る。先ホハ李斯が三族を一言の下ホ滅せり。今又我輩を怨と聞く。如何なるとを為出さん。謀士陳豨ハ此時。咸陽より來て傍ホ。始終を聞て居らーしが。此時始めて諸将ホ向ひ趙高既ホ三家の妻子の一族をさへ擒捕。李斯が如くホ為んとも。今諸将軍兵を擁。詔書を拒ひ。却て活ことを汐ん若詔ホ従て。咸陽城ホ回り王ぞ。必害ホ遇ひんと。語る節ーも陣中陣外勅使の下向と聞けり。

必竟勅使の旨趣ハ奈何。ホ章邯以下の諸大将の安危存亡如何ぞん。夫ハ次の巻を讀得て知べ。

詳ーく云項羽ハ既ホ章邯を破て勢ひ強大なるべ直ちホ兵を進

めそ追討んとするを范増諫て障南に陣を取人馬の息を休しん。
實に軍師の慮に感ずべし。其故奈何とゝれば柳素の章
邯に古今無双の大将なり。昔七國の時始皇の先王異人を途中
に救ひて公孫乾を討破り。韓の豪傑謬名を一刀に斬て四萬餘人を
降し。及ひ血を塗ざして趙の二十餘城を隨へしより戰功天下に名高し。今
敗軍して秦に歸るを恥辱とすれば亟谷關の要害に止り必死の地に陷て
一生の戰をなさんと。這を察する故に范増は軍を止めて漫に進まず。
密に間者を秦の都へ入て趙高と章邯の中を隔て種々の風聞と流言を
云しむ。咸陽の加勢を止さむ。章邯は進退谷窮し是全く范増が
謀なり。唯趙高が我意に募のゝ知るべし。

訂正補刻

繪本漢楚軍談初輯卷之五了